

分散会 15

司会者 加洲 景

記録者 岸田 知絵

会場責任者 灘岡 雅人

神奈川県横浜市

子どもにとっての「第一の大人」は保護者、「第二の大人」は先生であるが、「第三の大人」である地域の人々が、子どもたちの世界から消えてしまっている。「第三の大人」とは、現在では、ボランティア活動を通して子どもたちの様々な活動にかかわる人々である。NPO 法人まちと学校のみらいは、学校の活動をサポートするために、先生に地域の人材を紹介したり、子どもを核に地域活動に携わる大人のために「ココノビ net」という学びのサイトを通して、ボランティア活動の質や地域の教育力を高めるための情報を発信したりしている。私たちは、PDCA サイクルに基づいて事業を実施し、必ず最後に振り返りをする。教員も保護者も地域の大人も、一人一人が教育の担い手として、今までの知識や経験だけに頼らずに、大人も子どもも一緒に学ぶ社会になることを目指して活動している。



大越 雅美氏

中山MBC

中山 MBC は、バスケットボールを通して地域の子どもの健全育成を目指して活動している。「地域の大人が地域の子どもの育てる」という理念を大切に、「保護者立中山 MBC」として保護者が主体的に運営することを前提としている。信条は、「自主的に、我慢強く、誠実に、継続する」である。バスケットボールのほかにも野外体験活動やレクリエーション活動、クリスマス会などの交流体験活動も幅広く行っている。子どもたちは「ミニバスノート」を継続して書いている。普段の様子を観察とノートを通して、子どもの変容が分かる。成果としては、体力の向上、頑張る心の芽生え、挨拶と返事の徹底、親や指導者、友達への感謝の心の育ちなどが挙げられる。課題は、児童の減少と運動離れにより、部員数が減ってきていること、部員減少に伴って遊び的体験活動へのシフトなど活動内容を検討する必要性が出てきたことである。



白石 遥氏

西予市野村公民館

多様な体験、学習活動を通して、子どもたちの健全育成に寄与したいと考え、平成 24 年 9 月「のむらチャレンジ隊」を結成した。予算なし事業で始め、結成当初は思いつきの手作り企画が多かったが、事業を進めていくと、思わぬ効果が生まれ、様々な方面からタイアップの声が掛かるようになった。現在では、地域の方々から物的にも人的にも大きな支援をいただいている。支援の広がり理由としては、声を掛けていただいたことにノーと言わないこと、公民館だよりや SNS での情報発信、そして何より、子どもたちの元気な姿を見ていたいという地域の人々の願いなどがあると思う。

今後の展開としては、子どもたちに自ら企画立案する力を育成し、地域から求められる人材へと育てること、協力者の拡大(特に中高生や女性との連携)、野村で 2 か月に 1 回ある軽トラ市に参加し、ものをつくって販売するなど、商業体験や経済学習をさせることなどを考えている。



清家 卓氏

1 「ココノビ.net みんなで育む子供の未来」 大越 雅美

- 第三の大人というと、小さい頃ボーイスカウトで父親と一緒にキャンプに参加していたとき、レクリエーションをしてくれていた方々を思い出す。(木曾)
- 小さい頃は悪いことをしていたときに近くに住んでいるおじさんにかなり怒られた。当時はそのことに反抗する気持ちを持っていたが、その人に怒られてなかったら大惨事につながっていた。(吉永)
- 昔は、してはいけないこと、しなければならないことを育っていく過程で保護者、教師、地域の人に教えられてきた。今も昔も子どもが育っていく過程で、私たち大人の責任としてきちんとしていかなければならないこと、習ってもらわないといけないことがある。昔ほどこまで殴ったら命につながるか、けじめがあったように思う。今は加減が分からず結果として命を落とすような事態につながっている。(加藤)
- 学校もなかなか教えられていない現状がある。(加州)
- 具体的にどこの地域でどんなことをしたか。子どもたちに実際どこに行くか。実際の例を教えてください。(眞鍋)
 - 都筑区、緑区などの港北ニュータウン付近に学校支援地域本部がある。中学校のキャリア教育に関するコーディネートを行った。具体的には、仕事の話をしてくれる方を30人呼んでほしい、などの依頼を学校から受け、地域の人材を探し、その人的資源を学校につなげている。他には、高校生の受験の面接の練習相手など。地域の大人が高校生の模擬面接をする。
- PTAとNPOとのかかわりはあるのか。あればどのようなものか。(眞鍋)
 - PTAは子どもが卒業すると学校とかかわれなくなるので、NPOとして卒業後も残り、コーディネーターとして活動している。PTAOBが卒業後の受け皿になっている。現校の授業にかかわるところのサポートが大きい。
- 具体的に学校でのかかわりを教えてください。(灘岡)
 - 例えば、家庭科の授業で命の授業がある。小さな赤ちゃんを生徒たちに抱かせたいという依頼があると、相談を受けて地域で小さな赤ちゃんのいる家庭を探してくる。教師が依頼してくれたことに対して動くので、待ちの姿勢のことが多い。
- 活動の資金は。(清家)
 - 横浜市教育委員会から毎年40万の助成をもらって活動している。事務経費、備品、謝金、運送費など。あとはバザーなどで年間15万くらいの収益がある。
- 「ボランティアあるある」はよく分かる。強い思い込みがある人は講座で改められるものなのか。(西山)
 - 講座をすすんで受ける方は素晴らしいボランティアの方になる。ボランティアをしたいと名乗り出る方は、割と自信を持っている方が多い。教師に安心を与えるためにも、講座を受けてもらうようにしている。
- ボランティアの募集対象は。(西山)
 - 中学校区の中で活動してもらえる方。新聞の折り込みチラシが入る範囲。現在、隣の中学校区でもコーディネーターの取組が始まっている。

2 土曜日における地域の子どもの健全育成 白石 遥

- 中山には中山MBC以外のスポ少があるか。(清家)
 - ソフトボールは2年前、卓球は5年前になくなった。
- 現在、野村地区では、勝利至上主義になっていて、子どもの取り合いになっている。さらに、ジュニアスポーツは、中学校、高校の部活と連携がない場合が多く、部活を続けたいために多校区に行く子どもも多い。年間100試合を超える団体(ソフトボール)もある。しかし、その分その他の体験をする時間がない。ジュニアスポーツの今後の将来的な見通しはどうなっていくのだろうか。(清家)
- 松山から中山まで、民間の学童保育は連れていける。地域の子どもたち以外を受け入れるなら、学童保育との連携という方法もある。(豊田)
- 学校の統廃合の予定がないなら、近隣の学校や地域と連携して、人数を確保できるのでは。(西山)
 - 人数が少ないときは、隣の内子町に声を掛けて一緒に練習している。
- 汗をかきながらの健全育成、尊敬する。さらにMBCで育った子とが指導者となって帰ってき

ていることも素晴らしい。子どもの人数が確保できる限りは続けていってほしい。子どもと一緒に汗をかいてやっていることを一番喜ぶのは保護者の方。いい追っかけになる。子どもにも大人にもいい思い出になる。自分のサッカースクールでは、挨拶をしよう、仲間をつくろう、感謝しようという3つを掲げている。4つの小学校から1つの中学校へ行くが、中学校へ進学したときにすでに友達になっているというよさがある。(加藤)

- 高校生や大学生など、卒業した子どもが、また地域の子どもたちへかかわることにつながるので、卒業生への声掛けがあるといい。卒業生たちが帰って来て、また一緒に活動する場所があるとよい。(吉永)
- 地域に根差している指導者であれば、地域行事を考慮してくれるが、勝利至上主義の方が指導者だと苦しい思いをすることがあった。その視野をもってほしい。(大越)
- そのあたりは学校が調整役にならないといけない。スポ少の指導者と地域を調整していくのは学校の役目だと思う。スポ少はお金がかかってくる。お金がかかってくると指導者は勝たないといけなくなる。指導者は勝って認められる部分もあるので、学校や保護者と話し合わないといけないと感じる。現在、学校はどのようにかかわっているか。(西山)
 - 小学校の体育館の一面に部室があり、先生が夏休み中に見に来てくれたり、大会に応援に来てくれたりすることがある。
- 自分のやりたい部活がないために、中学校区を変える子もいる。その場合は引っ越しを伴う場合もある。(清家)

3 のむらチャレンジ隊 清家 卓

- ご自身のお子さんのことを聞かせてほしい。(西山)
 - 中学生、小学生、幼稚園の3名。自分の一番上の子どもが一期生。
- 多方面から声を掛かったことは、野村チャレンジ隊に期待するものがあるのではないかと思う。(眞鍋)
 - 地域で活躍できる人材は今までもいたが、公民館がなかったことで、やりたくてもできなかったのではないか。公民館が情報発信をすることで、やりたかった人が集まってきたのではないかと考える。
- 定員について詳しく教えてほしい。定員超えの場合は抽選か。(眞鍋)
 - 去年までは定員割れしていたが、今年から定員を超えた。担当者が自分1人なので、申し訳ないが断っている。20名でやっていきたい。定員を超えた場合は、高学年を優先したいと考えている。
- 毎回違う子がくるのか。(大越)
 - 同じ子がくる。
- 輸送や自転車の点検など安全面の配慮で工夫されていること。(中本)
 - 輸送や随行は公民館長や地域の方をお願いしている。地域の方にもボランティアで同行してもらった。保険にも入っている。
- 男女比はどうか。(灘岡)
 - 男が6名、女が14名。どこでも女の子が多い。集団合宿をしても女の子が多い。女の子の方が積極的。
- この活動で子どもが大きく変容した、地域に貢献したなどの活動があれば。また、今後も継続したい、町の風物日にしたいという活動はあるか。(吉永)
 - 達成感があったのは52キロのサイクリング。町の活性化は田んぼや稲刈り。今年で3年目の事業になり、恒例事業になっている。魚つかみも3年目。サイクリングも3年目をする予定。相手から提案されたことは毎年の恒例行事になっている。
- ダンスを教えていた高校生。人数が多くなってくると、特性が分からず埋もれている子もいる。他の子をどのようにとりまとめたのか。(豊田)
 - 野村中学校の創作部に依頼して、3名の指導者をお願いした。1週間はダンスの練習や、小学生へのかかわりを教えたりした。はじめは様子を見に行っていたが、ある時から行かなくても大丈夫になり、任せられるようになった。
- 社会教育主事講習に行ったきっかけは。またその費用は。(西山)
 - 単純にスキルアップのため。自分で主事をやっていくにあたって、疑問があった。団体のお世話係が公民館だと思っていた。1年目やってこれは違うなというわだかまりがあった。

たまたま愛媛大学で講習があると知って受けようと思った。費用は教育委員会負担。

- 感想ノートはどんな感じでやっているのか。(加州)
 - 年間で1冊ノートができるイメージ。1年間の活動の達成感につながっている。
- 協力者の拡大ということで、どのような声かけをされていくのか(五味)
 - 中学生や高校生のつながりを大事にしたい。熱心にきている子がいるので、そこから声を掛けてもらっている。現在は、城川中学校にたまたまダンスの好きな子がいるので、指導にきてもらっているが、部活優先。中学生はとくに部活が忙しい。青年団の女の子が活発に活動しているので、支援をしてもらっている。子どもたちと年の近い人に声を掛けていくのがいいのではないかと思う。
- 地域から求められる人材を育てていきたい。今の小学生をどのように育てるか、組織の展望は。(田中)
 - ジュニアリーダーの育成。中学生や高校生が少ない状態なので、要望があれば考えるが今のところは考えていない。
- 社会教育主事講習に積極的に参加されている。山口の中四国大会でも西予市の方に出会った。団体で来られていた。愛媛県からの参加の三分の一が西予市あった。かなり一致団結して、公民館活動を盛り上げようとしている気概を感じる。(灘岡)
 - 正職員が公民館主事をやっているということが一つの要因と考える。どの公民館も熱心に活動しているので、刺激を受けている。
- 公民館同士の連携は(灘岡)
 - 主事部会があり、取組の発表をしたり情報交換をしたりして研鑽を深めている。
- 学校との連携はあるか(加州)
 - 学校行事の時期を外すこと。また、校長先生と教頭先生に事業の説明をする。

4 その他（意見交換）

- 今日は尾道寺子屋から、たくさん参加がある。参加動機は。(灘岡)
 - いろいろな立場の参加者と交流する中で、互いを磨き合いと思い参加した。
- 今では公民館がないところもある。ということは、今まであった公民館活動を都会ではどう行っているのか。どこが代わりにやっているのか(眞鍋)
 - 横浜市は地区センターがあって、公民館はない。体育館や研修室があり、各地区に6、7か所ある。100%貸し館として機能していて、時間貸し。利用実績を上げるために、趣味の講座などに流されがち。地域づくりの拠点機能を地区センターに持たせようという動きはある。嘱託職員やNPOの人が管理しているので、公的な施設がどんな機能をもっているのか説明して講座を開いている。(大越)
- 公民館的な機能はないのか。(眞鍋)
 - 残念なことだが、ないと言えらると思う。区役所に社会教育を担当する人がほとんどいない。370人中10名程度しかいない。民の力でやっていかなければならない。
- 一館あたり的人数が多すぎて、公民館機能を果たすことができないのだと思う。(西山)
 - 地区センターはエリアが広く、対象者が多い。確かにそうだと思う。コミュニティハウスなどは3万人が対象になる。利用料が無料で職員1名、アルバイト2名。運用が難しい。(大越)
- 高松市も公民館がない。コミュニティセンターで半分程度の機能を担っている。(西山)
 - 西予市もそういう動きになってきている。(清家)

